令和２年度　博士学位論文

自閉スペクトラム症児の情動調整力の発達を促進する支援

―　小学校知的特別支援学級での２事例を通して　―

東亜大学大学院

総合学術研究科

臨床心理学専攻

学籍番号　１８ＣＰ１０２

氏　　名　原　口　淑　子

要　　旨

第一章　序論（問題と目的）

第１節　はじめに

American Psychiatric Association (2013) には「自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder:以後ASD) は,相互的な社会的コミュニケーションの障害である」ことが示されており，常同行動，こだわり，感覚の敏感さまたは鈍感さの存在も指摘されている。神経発達障害とすることで育て方の問題ではないことが強調されている。しかし神経発達障害が何を意味し，主要な症状の発現に，どのようにかかわっているのかは明らかになっていない。

第２節　自閉スペクトラム症児の情動発達

ASD児は，学校などの集団の場面で，大きな情動の爆発を示したり，パニックを起こしたりという行動問題を示すことがある。何故，このような情動の爆発やパニックが生じるのであろうか。

別府 (2014) は，ASD児は，情動の表出や調整の障害があると述べ，情動調整とは，情動反応のタイプや程度，タイミングなどを調整することであると定義している。Gilliam (2013) は，定型発達児は，養育者に情動反応を宥められる外的調整 (external regulation) を行い，この体験を積み重ねた後，自分で自分の情動を調整する内的調整 (internal regulation) に発達することを指摘している。一方，ASD児は，情動を共有しにくい特性があることから，養育者もその情動を把握しにくく，結果，外的調整がうまくできず，内的調整力も育ちにくいと考えられる。

筆者は,養育者がASD児の情動を共有し,情動調整を助ける支援を適切に出来れば,情動調整の力を育てることが出来ると考えた。社会情動発達のためには，関係性が根底になければならない。また，関係性を築き，情動調整を助けるためには，養育者による対象者の理解と適切なタイミングで，適切な関わりをもつことが重要である。そのため，筆者は，アセスメントを重視している。行動の理解のためにABC分析，認知能力の理解のために知能検査，社会情動発達のためには，セラピストとの安心出来る信頼関係を醸成した。さらに，内的世界の理解のために芸術療法のコラージュ・ボックス法を採用して，内的世界の表現を促進する方法を実施して成果を上げた。

第二章　情動に関する諸説

第１節　パーソン・センタード・アプローチ

パーソン・センタード・アプローチ（以下PCA）では，Rogers (1951) が情動は，不快ないし興奮した感情と，平穏ないし充実した情動との２パターンであるとし，前者は，有機体が何かを得ようとする努力にともない，後者は欲求の充足，すなわち，完了体験にともなうと考え，統合効果があるものとして扱っている。

第2節　精神分析

馬場（2005）は，情動はわれわれの心的生活にとって，中心的なものであり，それゆえ，精神分析理論の一部を占めてきたと言う。

第3節　認知行動療法

「自分自身，他人，状況についての結論を導くのに，自分の情動状態を顕著に用いることを，情動的きめつけと定義する。」（Beck et al., 1979;Burns, 1980,1989,1999;Freedman & Oster et al., 1999）としているように，情動が人の判断に大きく影響することを示し，重視している。

第三章　事例検討

第1節　中度知的障害を伴う自閉スペクトラム症児の情動調整の力が育つ過程①
ABC分析による理解

対象児童（以下Aと記す）は，小学校2年生の中度知的障害を伴うASD男児である。登校時より一日に何度も本研究で標的行動とした，体を反らせて，大声で泣き叫び，地面にひっくり返り地面に後頭部を打ちつけるという行動をしていた。この行動問題は，1年生の5月ぐらいから始まり，対応の仕方が分からないまま約一年間続いていた。

ABC分析により，以下のように行動問題の機能を推定し，環境を整えるとともに，段階的な介入を行った。1つ目の嫌悪事象からの逃避の機能について，安心して過ごせるリラクゼーションコーナーで過ごすことを許した。2つ目の注意獲得の機能に関しては，学級環境を少人数制に整え，注目を増やした。3つ目の感覚刺激を得ることに対しては，アスレチックやリトミックなどの活動を毎日設定した。4つ目の養護教諭から貰うカードの強化子獲得の機能に対しては，良い行動の後でカードを渡すことで，良い行動に対する強化子となるようにした。

以上のように，行動の意味を機能分析し理解した関わりにより，2ヶ月程で標的行動は消化した。しかし，苛々を別の行動で示すようになり，情動の安定までには至らなかった。

第2節　中度知的障害を伴う自閉スペクトラム症児の情動調整の力が育つ過程②
支援者とA児との信頼関係の醸成―PCA理論を基礎にして―

ASD児と関係性を構築し，即座に思いや願いを把握して支援することは困難なように思われる。C, Rogers（1957）は，でカウンセラーの3つの態度条件として，関係の中におけるカウンセラーの純粋性，無条件の積極的関心，共感的理解とその伝達を挙げている。この中の純粋性と無条件の積極的関心は，行えるが，共感的理解が難しいからである。1節で示したように，行動が落ち着いたことで，様々な活動を共に行うことが出来るようになったので，絵本を介して，休み時間の遊びで折り紙を介して，学習，行事などで経験を重ねることで，Aの世界を共有することにより，共感を可能に

した。それによって，Aは筆者を一人の人として興味をもち，「先生，大人になったん？」や「先生，好き。」等の発言をするようになり，筆者は，二者関係の確立を実感した。

Aへの共感的理解が可能になったことで，気持ちを理解し，伝え返したり，宥めたりすることが成功して，外的情動調整が可能になった。筆者との二者関係の確立を背景に，徐々に遊びが独り遊びから協同での遊びへと発展し，友人や他の教諭への積極的な関わりが見られるようになり，社会・情動の発達が見られた。

しかし，Aは，言語・描画・身体表現などによる表現が困難であることから複雑な思いまで理解すること出来ず，苛々を示すことがあり，内的情動調整は出来ない状態であった。

第3節　中度知的障害を伴う自閉スペクトラム症児の情動調整の力が育つ過程③ コラージュ・ボックス法を通して

人への信頼感の育ちを基に，内面の表現を出来る発達段階にあると見立て，複雑な思いからの苛々という残った課題へ取り組むこととした。余暇時間の折り紙による表現が豊かであったことから，コラージュ・ボックス法による内面の表現が，筆者によるAの内面理解を深めることとなることを狙った。

一回目のコラージュ作品は，筆者がAを冒険に誘い，二人でロケットに乗って空へ出発するというもので，単に母性的に寄り添うのではなく，一緒になって冒険（挑戦や活動）を楽しむことを示している。体育的行事に対し不安を示し，自傷行為を繰り返していたが，甘やかしてほしいのではなく，不安であるが，挑戦したい思いがあったことに気付き，筆者はAに伝え返すと，Aは「はい。そうです。」と強い表情で応えた。このやり取りとその後のAの頑張りから筆者の理解を伝えたことで，Aは納得し，情動の調整が出来たと考えた。この時期を情動調整の仕上げ期であったと考える。二回目の作品は，Aの男性性や攻撃性が表現された。この頃からAが情動の爆発を示しやすい挑戦場面においても嫌な表情はするものの手を挙げて支援を求めるなどの適応的な行動が出来たことから，自分で情動調整が出来るようになる，内的情動調整の芽生え期であったと考える。また，三回目の作品では，多くの友人と元気に走ってウィルスをやっつけるという健康的な社会性の高い表現をしている。この頃，聴覚過敏があり大きな音が苦手であったAが，火災報知器の音を冷静に悪戯によるものと受け止めて，耐えることができたことから，内的情動調整力が安定したと考える。

第4節　軽度知的障害を伴う自閉スペクトラム症児の情動調整の力が育つ過程 不安を示す児童の構音・音韻指導の効果の検討と考察

対象児（以下Bと記す）は，小学校3年生の軽度知的障害を伴うASD男児である。昨年度の引継によると，教室の中に居るはずのない「ねこ」がいるという発言があり，静かに着席しているが，名前を呼んでも，返事がないことがあったという。また，食べこぼしが多く，整理整頓が苦手であったという。解離を疑わせるエピソードや注意

集中の課題，言語の表出の著しい遅れから，不安の存在，言語の初期発達の発音や音韻意識の育ちにおいてのつまずきがあると見立て，構音・音韻指導に重点を置いて指導し，注意集中を促す明確な指示と環境設定，不安を減らす工夫をするとともに，段階的な課題に取り組んだ。

結果，発音が明瞭になり，発話が増え，平仮名の読み書きを習得した。注意集中においても課題があったBが，第一期に「これおもしろい。もっとやりたい。」と発言し，それまでの学習に向かう姿勢とは大きく異なり，意欲的，主体的になった。自分の言っていることが伝わらないのではないかとの不安や間違いを恐れて消極的であったBが，つまずきの解消により，積極的なコミュニケーション態度を示すようになった。

第四章　総合考察

養育者に情動反応を宥められることで外的調整を行い，この体験を積み重ねた後，自分で自分の情動を調整する内的調整が発達する(Gilliam, 2013)。情動調整の力は，両親を初めとする養育者がタイミングよく，適切に関わることにより育つ。それは，ASD児においても同様である。

本研究では，養育者がASD児と情動を共有し，情動調整を助ける支援をすることで，ASD児の情動調整の力を育てることが出来ることを示した。

一つ目の事例は，情動爆発を示す中度知的障害を伴うASD児は，2年間の支援において，第一段階として，行動問題を対象に，ABC分析により行動の意味の理解を利用することで，第二段階として，支援者と信頼できる二者関係を確立することで，最終段階として，コラージュ・ボックス法により表現された内面の理解を利用し，情動調整の力の発達を促進させた。二つ目の事例では，学習においても，生活においても，消極的であったASD児の言語のつまずきに注目して支援することで，言語能力の伸びと人との信頼関係を結べたことが自信となり，どんな場面でも情動を調整出来る安定した情動調整力を身につけた。

論文審査結果の要旨

本論文は第1章序論、第2章情動理論の解説、第3章事例検討、第4章総合考察の4章構成である。研究方法の分類からすれば「臨床事例研究」であり、統計的、実証的研究ではなく、原口自身が支援者として2年間症児とかかわり、工夫を重ねた実践事例研究である。支援が困難とされている自閉スペクトラム症児（ASD）の新しい支援方法を開発した画期的なオリジナル論文である。科研的に言えば萌芽研究に分類できる。

総じて4章構成の内、3章の事例検討が本研究の核心である。学校現場で1例は2年間、2例目は6か月にわたる支援の創造的工夫と実践過程が詳細に記述されていて迫力がある。

第1章序論に本研究の目的、方法、理論が明確に論じられている。

1）　自閉スペクトラム症（ASD）の米国精神医学会の定義からはじまっている。ASD が子育て過程で起きるものでなく、脳障害が仮定されていることが明記されている。このことは、とかく母親に原因を求める俗説を批判している。

2）　ASD の特徴は、社会的コミュニケーションの障害であり、常同行動、過敏、鈍感などの感覚にみられる。

3）　脳科学的障害と仮定されていても、その原因の究明はなく、医学的対応は出来ない現状にあることが指摘されている。

4）　そこで、臨床心理、福祉、教育などの領域にその対応を任せることになって、様々な対応のための研究が行われている。

5）　原口はASDの特徴は情動調整力の未発達、つまり、ASD児は情動の表出や調整に障害があるとの"学説"に注目したところが原口の優れた着眼点である。

原口のこれまでの実践体験から工夫した心理的対応支援の諸スキルが情動の調整力の養成に役立つと確信し、実践事例で例証すべく、支援活動を展開することに本論文の独創性がある。

6）　情動調整力には「外的調整力」と「内的調整力」とある。2例の ASD 児にこの二つの調整力を獲得させる新しい方法の開拓と支援の活動を展開している。

第2章は、原口の支援法に関係している3学説つまり　PCA,　精神分析、認知行動理論がどのように情動を理解しているか文献的に確認し、3学説が　ともに情動は人間理解の重要な側面であることを認めていることを確認している。

原口が実践だけでなく、情動の意味を理論的に確認していることが単なる事例研究でなく、原口の研究の理論的背景の深さがうかがえる。

第3章が重要なので詳述している。

原口の優れた点は、アセスメントとしてのABC分析、関係論のPCA、非言語レベルのコラージュ・ボックス法、はじめ様々な流派の技法を学習している点が他の研究者にない際立った才能である。

この能力を活かしてA児の情動調整力を高める事例に取り組んで成功を収めた事例である。

原口によるA児支援のアセスメント

1）A 児の不安定な情動の意味を明確にするため、ABC 分析を実施する。その結果　外的情動調整力を高める。

2）次いで PCA モデルで原口との信頼関係をつくりあげる。外的情動力の安全弁としてリラクゼーションルームを用意し、読み聞かせなどを活用する。

3）さらに、A 児との共感力を高めるため、非言語ツールのコラージュ・ボックス法を適用してみる。

つまり、3 段階の展開を予想し、３つの異なる枠組み、アプローチを組み合わせて、A 児の外的調整力、内的調整力を高めていく支援プログラムを設定した。

結果

第 1 段階：ABC 分析的な対応と結果

ABC 分析の結果、A 児の情動爆発の意味が 5 項目抽出出来たのである。この 5 項目を減少させる対応を重ねて 2 ヶ月ほどで標的行動が消失した。つまり外的情動調整に成功したのである。

第 2 段階:　PCA モデルによる A 児と原口の信頼関係の樹立

外的情動調整が可能になり「独り遊び」から「協同遊び」へ友人や教師との積極的なかかわりが出来るようにプロセスが展開した。

この章の記述には「原口が優秀なセラピストであるかかわりの様子が詳細に記録されている。この段階では、言語、情動、身体表現の促進へと発展していく。

第 3 段階:　コラージュ･ボックス法により内的情動調整力が高まる結果を生み出してきた。

折り紙による表現の豊かさに気づく。コラージュにより A 児の内的世界への原口の共感が高まった。そのことを A 児に伝えることができた。

また、情動の爆発を起こしやすい挑戦の場面でも、A 児は嫌な表情は見せるが、手を挙げて支援を求めることが出来るようになった。3 回目では聴覚過敏が消えて、いたずらにも耐えることが出来た。

B 児の事例

原口の持つ言語訓練能力が有効に働いて 6 か月で情動調整能力が発達した画期的な成功事例である。

「おはようございます。」を「haoma」、「姿勢・礼」を「sere」としか発語できない B 児が原口による発語訓練で発語が増加する。さらに平仮名学習で B 児の意欲が高まり、意欲的、主体的なコミュニケ-ションをとるようになった。６ヶ月で言語能力が高まり、他者との信頼関係が持てるようになった画期的な成功事例である。

成果と評価

(1)　支援困難な自閉症スペクトラム症児に、ABC 分析、PCA 的関係支援、コラージュ・

ボックス法という三つの異なる支援の枠組みを活用する、新しい支援法を開発した業績は高く評価できる。

(2) これまでこの領域では極めて少ない実践成功事例1例は2年間、1例は6ヶ月にわたって支援して成功した事例を提示できたことは、著者のアセスメント能力を含む支援者能力は極めて専門性が高いことを例証している。

(3) 社会的意義；発達障害学級の教師や保護者の指導支援に役立つ方法の開発はこれまで乏しく、極めて高い社会的意義を担っている。

(4) 臨床事例研究である。今後、チームを形成して、本支援法の効果測定やフォローアップなど実証的研究への道を拓いている。

(5) この方法は相談センターやクリニックではなく、学校現場で行われた実践研究であることに注目したい。本論文にも指摘されているように、他の教師、保護者、学級の友だちなどの支援ネットワークが活用できることに意義がある。

(6) 学校現場の教師が活用できる支援法として発展する可能性が高い。臨床心理士がこのような活躍の場を開拓していることを高く評価したい。

公聴会の結果

本論文の公聴会は令和3年2月16日、Zoom方式で実施した。

1時間（15:30-16:30）の発表と質疑が行われた。

論文提出者の発表後、審査委員　桑野浩明･桑野裕子両氏によるコメント、質疑、助言が行われた。

これに対して、論文提出者から適切な説明が行われ、質問への回答も納得いくものであった。自閉スペクトラム症児の新しい支援方法の開発とその実際の成功事例の創出研究は高く評価された。

以上、本委員会は本論文が博士（臨床心理学）の学位を授与するに値するものと認める。